

No.4- 2019.4.6

## 自由律俳句協会ニュースレター

発行：自由律俳句協会

編集責任者 新山賢治

### 俳句投句欄 “自由律の泉” を新設します 平岡久美子

このニュースレターに俳句投句欄 “自由律の泉” を設けます。皆様の作品発表の場として活用いただきたいと思います。

同封の短冊に一句、記名でお願いいたします。その作品を、経験豊かな「白ゆり」代表の棚橋麗未さんに選をいただき、選ばれた作品には選評をいただきます。（選評が不要の方は申し出てください。）

締め切り日 4月末日

あて先 〒193-0832 八王子市散田町2-5 8-4 平岡久美子

結果は、次回のニュースで発表いたします。

初めての試みで齟齬があるかもしれませんが、皆さん、楽しんでください。

### 文学フリマに出展します 白松いちろう

文学フリマ（＝文学フリーマーケット）は、10代～90代まで、プロ・アマもジャンルも問わず、小説も評論も詩歌もノンフィクションも集まるイベントです。個人・出版社はもちろん、文芸サークル、短歌会、句会、同人なども出店しています。現在、九州～北海道までの全国9箇所、年合計10回開催しています。

5月6日（月）11時から17時、東京流通センター・第一展示場（東京モノレール「流通センター駅」下車）で開催される文学フリマに、自由律俳句協会として初めて出展します。入場料は無料。自由律俳句協会のブースは「キ」の39/40番です。

今回、展示を計画しているものは「ぎんなん」「草原」「群妙」などの句誌や作品集。個人としては、佐川智英実さんのグループ句集などです。

展示コーナーには次のような案内文を添えるようにします。

「自由律俳句協会です。去年10月に生まれて、初めての出店です。  
自由律俳句は、季語や形式に囚われない自由なリズムで表現する俳句です。  
今回、山頭火や放哉で知られている自由律俳句を広く知って頂くため、ニュース  
レターや各グループの句集、代表的自由律俳人の句集など用意しました。一度、  
自由律俳句に触れてみませんか。」

担当は、佐瀬広隆、中塚唯人、野谷真治、そねだゆ、平岡久美子、白松いちろうです。  
出展を希望する方は担当窓口・白松まで御連絡ください。

〈連絡先〉 〒270-2329 千葉県印西市滝野2-6-16 白松いちろう  
e-mail : siroo@mist.ocn.ne.jp TEL&FAX 0476 - 80 - 9177

## 自由律俳句への窓（その二） 佐瀬広隆

第二回では、自由律俳句について思う事を、個人的主観で述べてみたいと思います。

### 二、感性の物差し

俳句を作る上で、一番大切にしなければならないことは、感性だと思います。感性に偽りなく、素直に表白する、そうして詠まれた句の一行が、俳句になっていれば、それは自分にとって素晴らしい俳句であり、他の共感も得られる俳句だと思います。

この感性の物差しの精度をあげてゆくことが、好い俳句を作るうえで最も大切な要素だと考えます。

井泉水は、思いをもって層雲俳句集へ表題をつけました。第一句集は「自然の扉」。「素材の自然は、部屋の中にはない、また部屋の内から眺めるのでは物足りない、扉を開いて、外に出てみよう。外の空気、爽やかな風、そして鳥の声、虫の音等、本物の自然がそこにあるではないか、頭の中に浮かべる自然ではなく、生の自然にふれて生まれてくる俳句こそ、本当の俳句ではないか」と（\*）。

第二句集は「生命の木」。井泉水は第一句集の集末で、「未だ新傾向の俳句が抜け切れていない、季題によってまだ俳句が作られている所がみられる云々、又、新傾向俳句から抜けきれない俳句が多数ある云々」の反省をのべていました。そこでこの第二句集では季題別の編纂をやめ、過去の例にはない作家別の編纂方法がとられました。そこで選句された句も第一句集とは様変わり。表題「生命の木」に随った井泉水の目指す自然の瑞々しい生命を掬う句へと変貌していました。

ひばり鳴き鳴きあがる浪音につつまれて  
草に寝れば空流る雲の音きこゆ

野村朱燐洞  
芹田鳳車

このように、層雲の俳句は過去の俳句のしがらみを離れ、自由律俳句の層雲の俳句へと歩みを始めました。己の眼で、己に問い、己の素直な感性の物差で句作りをすること、井泉水はこれを「自然・自己・自由」という言葉で表しました。生のありのままの自然を、自らの感性、囚われることのない自らのリズムで、自ずと生まれてくる、そうした俳句こそ、真の俳句であると述べたのです。己を深め、更に深めてゆくほどに、感性の物差しの精度はあがってゆきます。その感性をもって、己を客観視し、己に素直な一行の句ができれば、その俳句は己へのそして共感する他の人への最高の贈り物になるはずです。

俳句ができた時、それが俳句であるとお墨付きがないと自分の句に不安を感じます。曲がりなりにも俳句らしい形をもっていただけのものとされたらいいのです。

定型俳句では、宗匠を中心として会が組織されていることが一般的です。宗匠が弟子に、俳句は花鳥諷詠の詩である（虚子）と教えます。季題をふまえ、切れ字を用い、5・7・5の17文字でまとめ句にすれば、自ずと俳句の一行になります。これで全てではないと思いますが、これを破れば俳句でないといふ初心者に戒めます。物事を成し遂げる「守・破・離」の格言があります。季題、花鳥諷詠、17文字の制約の公式を逸脱する句は「俳句らしさを纏った新しい詩」であって、俳句ではないとする俳句の公式を、初心の人は、「守」を達成せんがため、初々しい生の感性をすりへらして守ります。第一に思い浮かんだ言葉は数からいって相応しくない、数あわせのために同義語の別の言葉を当てはめよう、助詞を入れてみよう等、感性とは遠い判断で、一行にしてゆきます。己の心の感性に眼をつぶってまでこれを達成することが俳句であるために必要な事だとし、そして、そうした句作りが当たり前になってゆきます。この教えを達成した後に、教えを破り、離れることはそうとうに難しい、出来ないといってもいいくらいです。いつも教えの鎧が俳句にこびりつき、それが「臭み」「月並み」に繋がってゆきます。そうした状況を脱却して己の素直なリズムに随うことは容易ではありません。定型俳句では、「離」ができて、初めて自己の俳句が生まれてくると私は思います。

自由律俳句では「俳句は一つの段落を持つ印象の詩である（井泉水）」と教えます。一つの段落がある事で、俳句の内容としての最低の要件を満たします。韻文であることのリズムは自己に内在する自分の素直な自然なリズムに合わせます。そのリズムは、5・7・5ばかりでないもっと選択肢の広いリズム、感性に随ったリズムです。

そうしたわけで、まず、自分の気持ちに素直な一行を書いてみてください。自らの自然な気持ちに随った一行を沢山書き留めて下さい。次に、その一行の中に無駄な言葉はないか、その一行を口にくわえてみて、違和感がないかどうか自らの感性に問います。手慣れてくれば、思いが説明ではなくして感性に浮かんだ物の表現に託され、端的に表現されてゆきます。自己の眼での確かな自然、そして自然の奥を見詰めるようになってゆきます。ここでは、いままで経験したり学習したりして知識としてある表現を越え、自らの物言いの表現で表白してゆくようになります。そうして生まれた句

の一行は、自己には共感できるものです。しかし、その一行が他の共感が得られるかどうかはまた別です。他の共感がなければ、己だけに囚われた句になっているのではないか、己でない月並みが己に染みついでいないかという反省になります。

初めは、自らの感性に随った句であれば、その句を否定せずともよいと思います。自己をより深くみつめ、表現されるなら、自然に囚われが剥げ落ち、それは必ず多くの共感を得るようになってゆくと思います。囚われた自己であれば他の共感はありません。自由律俳句では、真の自分に行き当たって自ずと生まれた俳句が自己の俳句ということになります。

行き方は違ってはいますが、俳句の行き着くところは定型の俳句でも自由律の俳句でも同じであると思います。定型の俳句でも囚われない自由な表現になっていなければ俳句としての共感は得られないと思います。

自由律俳句では、「一人一境」、自己の感性の物差しをひたすら磨いてゆく（虚子のいう、「深は新なり」、井泉水の「泉を掘る」）こと、真の己の表現を追い求めてゆくことがこの自由律の俳句の道を歩むことだと思います。

あひたいとだけびしょびしょのはがきいちまい	平松美之（星童）
蛍一つ二つ闇へ子を失うている	河本緑石
盗みせし子の親へ椅子をすすめる	七戸黙徒

\*当時俳句は、座の文学。題が与えられ、それに適う俳句が創作された。そうした、頭でこしらえられた俳句は本当の俳句ではないと井泉水は感じていた。

## 「自由律」と「俳句」－井泉水の図形をめぐって 荒木響人

はじめに

自由律は決して俳句の亜流などではない。それは何物にも代えがたい独自の詩法と魅力とをそなえる独立した詩型であり、俳句とは明確に一線を画する表現手段である。

私がこの数年、様々な媒体において評者として触れることの出来た数多くの魅力的な作品は、「自由律」としか形容しようのないものであり、その作者は「自由律作家」としか呼びようのない人達であった。

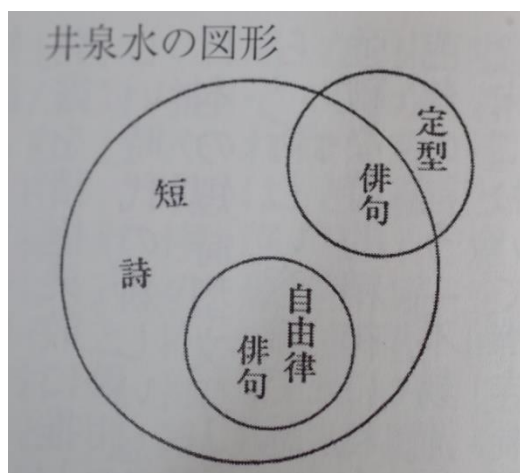
以前、ある自由律句誌でどなたかが、他者の作品に触れつつ「やっぱり自由律は素敵です」と溜め息のように呟かれておられたことがあった。私は深い共感を覚えた。その方は「俳句が素敵」だと言ったのではない。あくまでも「自由律が素敵」だと言ったのだ。この言葉を他の何物にも変換することは不可能だと、私はその時強烈に実

感させられたものである。

最初にお断りしておかねばならないのは、以下の文章は二十一世紀の前半における自由律の現状に即して書かれたものであって、単純な詩的理論を展開したものではないということである。現代自由律に深く関わる者が、愛すべき作品とその作者と、詩型そのものの存続を強く願って書かれたものであるということをご理解して頂きたいと思う。

## 一、 井泉水の描いた図形

萩原井泉水は昭和四十八年に出版された『短詩入門』という本の中で、短詩と定型俳句と自由律に関する一つの図形を描いている。まず「短詩」という大きな円があり、その中に収まる形で「定型俳句」と「自由律俳句」という二つの小さな円が存在している。この図で注意しなければならないのは、その二つの円同士が完全に独立していることであり、さらに自由律の円はすっぽりと「短詩」の枠に収まっているが、定型俳句の円の半分程はその枠の外に飛び出しているということである。



あり、その中に収まる形で「定型俳句」と「自由律俳句」という二つの小さな円が存在している。この図で注意しなければならないのは、その二つの円同士が完全に独立していることであり、さらに自由律の円はすっぽりと「短詩」の枠に収まっているが、定型俳句の円の半分程はその枠の外に飛び出しているということである。

私は、初めてこの図形を見た時、井泉水の批評家としての炯眼に深い畏敬の念を覚えたが、あくまでも一個の詩人として純粋に短詩と向き合った時に、彼の詩精神のスクリーンに映る短詩型文学の在り様のはっきりと理解出来たように感じたものだ（この図で「自由律俳句」という言葉を「自由律句」とし、定型と自由律の円の境を接するものにすれば、私自身が今日考えている見取り図と何ら変わらないものとなる）。ただ問題は、井泉水という人が、純粋に一人の詩人として在ればそれで良いというような存在ではなかったということである。彼の背後には大勢のお弟子さん達や門人達がおおり、「自由律」という既成の秩序から離脱した新しい詩型の未来がその双肩に重くのしかかっていた。日本の短詩型文学が宿命的に背負うことになる課題は、そのまま井泉水の指導者としての在り様を覆い尽くしていたのである。

G・バタイユは『文学と悪』のジャン・ジュネを論じた章の中で、「歌をわき起こらせる美とは、掟への侵犯にほかならないし、また、禁則への侵犯こそ、至高性の本質でもある。至高性とは、生の持続を保証するさまざまな掟のかなたへと、死をもものともせず超出する能力にほかならない」と述べている。秩序と規制の枠の外に出ることこそが詩人としての至高の務めであり、それゆえに詩人は自らを断罪する者として存在するほかはなく、「弁解の口実もなく、全責任を一身にひきうけながら、虚無のなかにあらわれ出ることになるだろう」（「ボードレール」）。

自由律が俳句の掟である二つの「律」、すなわち「律動＝リズム＝五七五」と「規

律＝規則＝季語」からの自由を唱えた時、自由律に携わる人間は一切の伝統から切り離され、虚無の只中に晒される危険性があった。一個の詩人としての井泉水にはそれに耐え得る覚悟があったかも知れないが、新しい詩型の指導者としての彼にとってそれは決して等閑に付すべき問題ではなかったのである。そこにこそ、世界文学史上においても類を見ないような日本の短詩型文学固有の問題があり、井泉水が「俳句」を超克し、詩人としての自らを貫徹し得ぬ理由が存したのだと私は考えている。

## 二、 禅寺洞の理想と口語自由律

吉岡禅寺洞という人もまた、口語自由律が持つ短詩としての性格を明確に把握し、その現代的な発露を積極果敢に推し進めた指導者であった。新しい時代の新しい息吹の中にある現実の素材を、日本の短詩型文学が持つ高い詩精神を保ちながら、新しい意識で詠いあげること、そうした彼の強靱な詩的精神に私も深く共感するし、それこそ芭蕉の言う「不易流行」そのものであって、その意味において禅寺洞が芭蕉の理念を正しく受け継いでいることは疑い得ない。

ただ、もし禅寺洞に決定的な誤算があったとすれば、それは俳句という形式の全体が漸次口語自由律に移行して行くものだと考えた所に見出されるべきだろう。彼は「現代語（口語）俳句」と題した文章の中で次のように述べている。

「現実の複雑化は、言語もまたそれにとものうて、七五調とか、五七五の素朴なカタに、感情を盛ることができなくなった。それは私たちの呼吸がながくなっているからでもある。／このようにみえてくると、現代の俳句は、いわゆる俳味などというものにあるのではなく、過去の人々の素朴な呼吸音、五七五にあるものでもない。（中略）／俳句は俳味や、文語五七五で、こんごうけつがれるものではない」

自由律に携わる人間にとって深く頷ける言葉であるにせよ、今日の自由律と定型俳句の立場を顧みる時、改めて複雑な感慨を覚えられずにはいられない。定型がいわば詩的禅譲によって非定型へと生まれ変わるべきだという考えは、自由律短歌の提唱者達と意を同じくするものであるが、万葉の古来から続く定型の魔はそう一筋縄で行くものではなく、どちらも現実にはそうはならなかった。結局それは芭蕉や子規の俳句改革があくまでも既成の掟や秩序の内部において起こったものであるのに対し、形式と規則の決定的な破壊によって誕生した自由律はそれとはまったく別の詩的内実を有する新しい詩型として現れたということに尽きると、私は考えている。

そこには、いわば「改革」と「革命」の違いほどの深い亀裂が存在していた筈であって、禅寺洞は同じ文章の中で「俳句もまた俳句とよばず、短句とか短詩とか、子規が名づけていたらよかったかもしれない」と述べているが、本当にそうすべきは実は禅寺洞自身だったのだ。子規は改革者に過ぎなかったが、彼はまさに革命家と呼ばれるに相応しい理論家にほかならなかつたからである。

俳句そのものがやがて口語自由律として生まれ変わると確信していたからこそ、禅寺洞はその正当性の淵源を芭蕉や子規の言に求めなければならなかつたのであるが、

そうではなく、定型俳句とはまったく別個に存在する新しい詩型の創設者としての意志と気概とを世に示すべきではなかったかと、二十一世紀に生きる自由律作家としての私は考えているのである。

### 三、 自由律作家としての金子兜太

金子兜太は。歌人・岡井隆との共著である『短詩型文学論』（昭和五十二年）の中の「俳句論」の冒頭で、次のように述べている。「俳句の特色は十七音と季語にある一というのが従来の常識であるが、このうち季語をはずし、十七音に替えて『最短定型詩型』という概念を採用したい」「十七音という固定的な文語定型によって俳句を規定してしまうことは、一面的にすぎる」「『約束としての季語』が、俳句の多彩な詩語を約束していた時期から、現在では逆に拘束に転化している」

もし名前を伏せて読めば、井泉水が禅寺洞の評論と間違われるのではないか。まさにこれは「自由律論」以外の何ものでもないと言いきださる。実際、彼が一貫して示している自由律への共感は夙に知られている所でもあるが、私は、時に、金子兜太という詩人は本来自由律陣営の中から現れるべき人だったのではないかという思いに駆られることがある。

<港に雪ふり銀行員も白く帰る><首のあたりを線路が走る過労となる><妻にも未来雪を吸とる水母の海><夜々俺のドア叩くケロイドの枯木><鉄ばかりの街清潔な君等と酔う><火星汚れて会議のあとの窓を飾る>

自由律句としても読めるこれらの作品はそのよい例証であろう。しかし自由律自体が俳句の「亜流」であり「一変種」であると捉えられている状況下にあっては、それは到底不可能なことだったのである。この間の事情は、例えば西東三鬼等の新興俳句運動にしても同様であり、いわゆる前衛俳句にしても然りである。ただ自由律には、もともとそうした大きな表現上のうねりを導き出すための豊かな土壌があった筈なのである。詩法上のさまざまな試みを現代の錯綜した事象に添う形で、現代人の意識の暗幕に映るがままに描くことが、今日においても自由律の可能性として肥沃な詩の大地に遺されていることを私が常に信じている所以である。

私はここで、自由律は俳句であると信じておられる方々のお気持ちを覆そうなどとは思っていない。しかし問題は自由律の未来に関わることである。もし将来の自由律を背負うべき新しい詩人が現れた時、私は彼らに明確な自恃と誇りを持って「自由律作家」と名乗って欲しいと願っている。俳句の未来は黙っていても俳句作家とその大勢の予備軍とが考える。しかし自由律の未来は自由律作家が考えなければ誰もその存在を保証してはくれないからである。これは私の祈りでもある。

（「群妙 第22号」より）

## 自由律俳句電子化プロジェクトからの報告

当協会では、過去、様々に紡がれてきた「自由律俳句」の貴重な遺産を電子化することで、いつでもどこでも手に取ることができ、次代の人々にも語り継がれる方法を模索しています。その手始めに、「層雲」など自由律の原点と呼ばれるものを PDF 化し、ホームページ（「自由律俳句協会 電子図書書棚：<https://www.自由律.com/book>」）に保管する作業を進めています。

これまでに、電子化を終えたのは以下の書籍です。

- ◇**昭和 19 年** 俳句日本 6 月創刊号（1 巻 1 号） 俳句日本 7 月号（1 巻 2 号）  
俳句日本 8 月号（1 巻 3 号）

### **昭和 21 年**

層雲 6 月号 層雲秋季号 層雲冬季号

### **昭和 22 年**

層雲春季号 層雲夏季号 層雲 7 月号 層雲 8 月号 層雲 9 月号 層雲 10 月号  
層雲 11 月号 層雲冬季号

- ◇層雲自由律 90 年作品史

層雲第一・第二句集 自然の扉 生命の木（著：荻原井泉水）

木村緑平の俳句鑑賞その一 その二（著：佐瀬広隆）

- ◇常盤ネットワーク増刊号 下村逸蒼特集総集編

この句集、評論、結社発行の句誌、など、次代に遺すために電子図書化したいと思うものが在れば以下のメールまで御連絡ください。打合せの後、当協会が責任を持って電子図書化（当面は PDF 化）しホームページの書棚に収納します。

**[jiyurituhaiku@gmail.com](mailto:jiyurituhaiku@gmail.com)**

## 電子化に向けての作業手順

松岡月虹舎

小生は独自で電子図書化をしているので、この方法が一般的かどうか大いに不安であるが、まずはプロセスをざっと明らかにする。ソフトを持たぬ方は概念を解っていただければ良い。



まずは本をスキャナーでスキャン（使用機器：エプソン GT-S650）するが、仕上がりを閲覧するモニターの大きさを念頭にして1頁毎にスキャンするか2頁見開きのどちらかで、スキャンすれば良いのだが、小生はその本の見開いた時のイメージを記録したいので全て見開きで作業している。モードは色々と対応できるプロフェッショナルモードに設定する。反射原稿、書類向きを選択、解像度は350dpi あれば仕上がりに満足できる。イメージタイプは後々色々と対応できる24bit カラーを勧める。アンシャープマスクにチェックを入れておく。写真版の場合はモアレ除去にチェックを入れる。ヒストグラム調整はプレビュー表示とグラフ曲線を見ながら調整する、尚トーンカーブ表示はノーマルにしておく。文字列は書籍名を入れ、開始番号は表紙関係と実際の頁数を使い分ける。保存形式はJPEGで。

次に、アドビ・フォトショップでの作業に移る。基本作業として、水平垂直とる、切り抜く、レタッチをする、シャープを調整する、モノクロバリエーションを選択する、レベル補正する、保存形式はPhotoshop PDFを指定してオプション画質を最高にしてPDFを保存する。この間原稿の状態により臨機応変に対応する。

最終工程は、アドビ・インデザインを立ち上げて、頁毎に貼り付ける作業をして、PDFで出力保存すると電子書棚の様なスクロールするPDF画面が立ちあがる。

## 俳句日本、戦後層雲の電子図書化作業中に憶う

まず、電子書棚に掲載の「俳句日本」発刊の背景には、1940年の印刷の資材配給制がある。政府は平和産業を整理して、浮いた人材・物的資源を軍需産業に投入しようという超重点主義をとり、中小の印刷会社は整備の対象となってしまう、東京では、5,800あった印刷工場が1,200足らずまで減少していた。出版会社は内閣総理大臣の管理下に属し、国家的情報・宣伝活動の一元化および言論・報道に対する指導と取り締まり下にあった。昭和16年頃から始まった同種・同傾向の雑誌の自発的・強制的な統廃合は、昭和18年の出版事業整備要綱に基づく企業整備の開始とともに加速し、昭和19年度だけで約2000誌が廃刊に追い込まれ、金属類の供出の上、空襲による印刷会社の消滅が出版を一層困難にしている、そうした背景に出来上がった雑誌であるので、内容の重さのほか紙質の悪さと印字の擦り切れ、今日までの経年劣化が加わっている。

また「層雲」戦後復刊時の背景には、GHQの出版規制があるほか、戦中からの活字の擦り切れ、紙質の悪さで、当時の出版の苦勞がしのばれ、読者にもそうした苦勞を感じていただきたい。

## 第22回自由律俳句フォーラムのお知らせ

- 投句は「自由題」および「テーマ句一時代」の2句1組で未発表のもの  
(公平を期するために大会当日まで句会や他所での発表はお慎み下さい)  
投句頂いた句を後日投句者全員で互選し、最高得点句は大賞として10,000円、2位に5,000円、3位に3,000円、その他上位2名に2,000円を贈呈します。また得点結果を記載した詠草集と会の模様を記載した小誌も後日お送りします。  
奮っての投句と、自由闊達な意見の交換の句会への参加をお待ちしています。

1. 日時 2019年5月25日(土) 午後1時半より5時まで
2. 会場 江東区芭蕉記念館・分館会議室  
〒135-0003 東京都江東区常盤 1-1-3 Tel : 03-3631-1448  
地下鉄都営大江戸線 森下駅 A1 出口より徒歩10分  
東京メトロ半蔵門線 清澄白河駅清澄通り改札 A1 出口徒歩7分
3. 投句料 1,000円
4. 参加費 1,000円(当日の資料代含む) 投句者は参加無料  
※投句のみの方は1,000円を郵便振替口座00170-6-38652 海紅社宛 ご送金下さい。  
※当日参加者は会場でお支払い可能です。
5. 応募要項 申込用紙に①～⑤まで必ずご記入の上ご郵送下さい。  
(ハガキ・メール・FAXも可。メールはtadata8008@nifty.comまで)  
①氏名(所属会名) ②〒住所 電話番号・メールアドレス ③投句二句 ④当日の出・欠 ⑤懇親会 出・欠 どちらか必ずお書き下さい。(後日変更可能です)  
※懇親会は会の終了後、引き続き同所で行います。(費用1,500円)
6. 送付先 〒154-0012 東京都世田谷区駒沢2-28-14  
「海紅社」中塚唯人宛 電話・FAX : 03-3422-6962
7. 投句締切 2019年4月10日(期限厳守でお願いします。)
8. 主催 東京自由律俳句会、プロデュース「しらゆり句会」  
★投句は締切が迫っているので、ご注意ください。

### ○会費未納の方へ

本年度の会費未納者が17名あります。お忘れになっているかと案じております。該当の方へ納付書を同封しましたので、なるべく早くの納付をよろしくお願いします。